

ニヴフ語の *sinduX* 「樽」 についての短い考察

丹菊逸治 (たんぎく いつじ) 千葉大学大学院社会文化科学研究科 (後期博士課程)

0. 表記について

本稿ではアイヌ語、ニヴフ語、ウイльта語を扱う。混乱を避けるために、単語の後ろに() 内で言語名を略記した。(A)アイヌ語、(N)ニヴフ語、(U)ウイльта語である。さらに続けて地域名や出典を()内に示した場合もある。アイヌ語は特に記さない限り樺太方言形である。ウイльта語には()内に *acc.* として対格形を記した。ウイльта語は主として池上二良(1997) によった。表記も同書に準じたがコード上の困難により一部フォントを変更してある。なお、ニヴフ語 *c*, *cʰ* はそれぞれ [tʃ], [tʃʰ] である。

1-1. ニヴフ語の *sinduX*

ニヴフ語で、ある種の容器をさす単語に *sinduX(N)* というものがある。北部ノグリキ周辺においては日本製の樽である。高橋盛孝(1942) によるポロナイスク方言(注1)でも *sintuX(N)* 「樽」が採録されているが、これもやはり日本製の樽のことだと思われる(注2)。Савельева и Таксами(1965) にも *бочка* 「樽」のニヴフ語(アムール方言) 訳として *sindux(N)* があげられている。この語自体は日本からの樽流入以前からあった語らしく、サハリン内のアムール方言では別のものを指すようである(注3)。

1-2. *sinduX* の用途

ノート者がノグリキで聞いた事例(注4)では、この *sinduX(N)* は単なる「箱」*waqqə(N)* とは別のものを指すという。日本からの樽は第二次世界大戦前に北部にあった日系企業経由という可能性が高い。フタ以外の全体が竹製だったという。竹を素材とした場合、耐久性に問題があると思われるが、防水性が高くなる。おそらく何か液体などを運んできたあとの空容器と考えられる。ノグリキではアザラシ油にハマナスの実をつけこむために用いられた。「木製容器あるいは戦後の金属やプラスチックの容器よりも、竹製の *sinduX(N)* のほうが適している」という。この *sinduX(N)* は大変珍重され、当時良質な犬一匹と交換された。日本人との交渉がとだえた戦後は入手できなくなったという。大きさは一斗樽よりひとまわり大きいようである。樽はおそらくニヴフ人の生活上も大変便利なものであり、その使用はノグリキ周辺に限定されたものではなかった。第二次世界大戦以前のポロナイスクで撮影された魚処理台(魚干し場)の写真には、木製と思われる樽が写っている(注5)。台の上に置いてあるところをみると、貯蔵用ではなく、魚の切り身を水洗いするためのものかもしれない(注6)。現在のノグリキでは金属製の大型容器が用いられている。

1-3. 資料について

この *sinduX(N)* はニヴフの民具としてはあまり知られていないようである。ウイльта語にも同系統の語があるが、やはりその名称をもつ民具は博物館のカタログ等でもみかけない。ニヴフ、ウイльтаのものはユジノサハリンスクにあるサハリン州立博物館では展示されていない。筆者が単語を聞いた家ではすでに現物は残っていなかった。ノグリキやネクラソフカの郷土資料館でも収蔵されていないようである。ひよっとするとニヴフ固有の文

化ではない、ということで無視されているのかもしれない。

1-4. アイヌ語の sintoko

アイヌ語の sintoko(A)は周知のように日本製の行器(ほかい)を指す(広義には樽なども含む)。アイヌ語の複合語は単音節の語根に分解できることが多いが、この語は明確な分解ができないようである。また、地名にも見られない(注7)。当然借用語の可能性が考えられる。器物自体の流入元である日本語ではこの sintoko(A)に類する名称は知られていない。アイヌ語で sintoko(A)という語形で借用されるためには、日本語で*シドコ(*sidoko)というような語形が想定される。シトコガ(四斗樽)という語があるが、コガは konka(A)という語形で借用されているため、むしろ*sitokonka となるほうが考えやすい。本稿では日本語からの借用という以外の可能性を探ってみる。

1-5. チュルク諸語の sanduk 系語彙

高橋盛孝はニヴフ語の sinduX(N)をアイヌ語からの借用と考えていた(注8)。おそらくそれはこれらの単語がともに日本製の容器を指すためであろう。また、sinduX(N)に類似した語はウイラタ語以外のトゥングース諸語・モンゴル語に確認できないためかもしれない。しかし、sinduX(N)に類似した語はチュルク諸語やイラン語系統の言語に散見される。それらは樽ではなく、いわゆる「長持」(衣装箱)を指す。

トルコ語 sandık 「chest, coffer, box...」。

チュヴァシ語 suntăx (с у н т ă х) 「箱」(ロシア語 ящик)。

キルギス語・タタール語 sandək (с а н д ы к) 「長持」(ロシア語 с у н д у к)。

バシキール語 handyk (һ а н д ы к) 「長持」(ロシア語 с у н д у к)。

ペルシア語 sandūgh 「トランク、(主に貴重品を入れる)飾箱、箱、籠」。

シュグナール語 sanduuk (с а н д ӯ к) 「箱、長持」(ロシア語 ящик、с у н д у к)。

また、クルド諸語には他にも音価は不明だが sanduq 「箱」という語形もあるらしい(注9)。

ロシア語にも同系統の с у н д у к 「(貴重品などを入れる、鍵のかかる)櫃、長持、衣装箱」(注10)という語彙がある。東洋起源の語彙で、サンスクリット起源のアラビア語 sanduk がチュルク諸語を経由してロシア語に借用されたとされる(注11)。なお、チュルク系諸語でもサハ語の sunduuk, suntuuk、はロシア語からの借用とされる(注12)。

モンゴル語系諸語ではどうやら見当たらない。ブリヤート語では syndyyk がロシア語 с у н д у к の訳語としてあげられているが、これはあまりに語形が一致していることから、ロシア語からの借用と考えるべきかもしれない(注13)。なお、訳語としてチュルク諸語でもロシア語の с у н д у к が当てられているため、おそらく同様の用途のものと考えられる(注14)。ただし、あるウズベク語辞典では「トランク、箱」という日本語訳が当てられている(注15)。

1-6. アイヌ・ウイラタ・ニヴフ語の sintoko 類似語彙

sanduk に近い語形としてロシア語 судок 「1 ソースポット、ソース入れ (ソース・カレーなどを入れる小船型容器 2 (食卓用の) 薬味スタンド 3 (複数形で) 出前料理運搬用容器、ランチペイル、、、)」(注 16) がエヴェンキ、ウイльта語に sodook (U) 「箱」(ロシア語訳は ящик) として借用されている、という(注 17)。池上二良(1997)には soddooki (acc. soddookkee) (U) 「食器を入れるはこくろ судок」の語がみえる。судок が sodook で借用されているなら сундук も *sodook に近い形で借用されていていいはずであるが、トゥングース諸語にそれらしき単語は見当たらない。元の形である sanduk に近い語形でも見当たらない。しかし、サハリンまでくると第一音節の母音が i となった容器名称が現れる。

アイヌ語 sintoko (A) 「行器」

ニヴフ語 sinduX (N) 「樽」

ウイльта語 siltukku (acc. siltukkoo) (U) 「たらい」。ロシア語からの借用語 miiskø と同義という。」

ウイльта語 sittoo (acc. sittokkoo) (U) 「(日本の) たる (樽) -barrel [<アイヌ語 sintoko]」

前述のように高橋盛孝はアイヌ語とニヴフ語の類似を、アイヌ語からニヴフ語に借用されたためと考えたが、起源的には北方ユーラシアに拡がっている sanduk 系の借用語の可能性もある。Черных (1993) は 14 世紀のクマン語語彙集からラテン文字による sunduq, synduq の両語形をあげているが、当時から語形の第一音節母音に揺れがみられることを示しているのであろう。今後新たな sintoko の類似語彙が報告される可能性もある。

サハリンでは「樽」、中央アジアでは「長持」と指すものが異なるが、ともに外来の容器であることに注目したい。「樽」には液体を入れるばかりでなく、ものを入れておくこともある。

1-7. ウイльта語の sittoo

池上二良(1997)では、sittoo (U) をアイヌ語からの借用としている。ウイльта語には名詞の主格形において語幹末子音が脱落する傾向がある。対格形ではこの子音は保存されている。アイヌ語からの借用だとするとこの傾向が適用されているのであろう。なお池上二良(1997)では他にもウイльта語 oččii (acc. oččikkee) 「(日本の) 膳、盆。tray [<ア otcike <日 をしき]」など対格形が一致する借用語が指摘されている。

アイヌ語で「樽」を指す語には日本語からの借用語 ontoro (A 樺太) ontaro (A 北海道) がある。日本製の樽がアイヌ語とともに入ってきたなら、ontoro (A 樺太) が借用されるほうが自然である。アイヌ語において「樽」も sintoko (A) の一種ではあり、「樽」を指すのに ontarosintoko (A 北海道) 「樽シントコ」という名称もある(注 18)。このことから次のような仮説をたてられるかもしれない。アイヌ語樺太方言でも ontoro (A) 「樽」は比較的新しい借用語であり、かつては sintoko (A) と呼ぶことが多かった。そしてアイヌ語に ontoro (A) が定着する前の呼称 sintoko (A) がウイльта語に入った、というものである。いずれにしても結果的にはアイヌ・ウイльта・ニヴフ民族すべてにおいてこれらは自製品でない上に、流入元の名称をそのまま借用していないようにみえる。物そのものも名称も不

安定な状態だったということだろう。

先にふれたように現在のところ、ウイльта語以外のトゥングース諸語に *sildukku*(U) 系の単語があるかどうか調べられなかった。管見した限りでは見当たらないが、自製品でないため辞書に載りにくい単語かもしれず、現地では案外簡単に聞かれる可能性もある。

2. アイヌ・ウイльта・ニヴフ語の共通語彙の考察

2-1. アイヌ語とウイльта語の類似例

語形だけから見ると、アイヌ語 *sintoko*(A) とはニヴフ語 *sinduX*(N) よりも、ウイльта語 *siddoo*(U) の対格形 *sittokkoo*(U) のほうが近い。ウイльта語のもう一つの語彙 *sildukku*(U) も *sanduk* と同起源の語彙かとも思われるが、*sildukku*(U) の子音 *l* は説明がつかない。しかしサハリン内だけで考えれば、

「ロシア人」 *nuca*(A), *loc^ha*, *loc^h*(N), *luča*(acc. *luččaa*)(U)

「木幣」 *inaw*(A), *naw*(N), *illaw*(U)

などのように3言語の間で *l* と *n* に分かれる類似の語彙が複数存在する。*loc^ha*(N), *luča*(U) がアイヌ語で *nuca*(A) となる例からみれば、*sildukku*(U) と *sintoko*(A) が対応している可能性がある。

このようにアイヌ語がニヴフ語よりもむしろウイльта語に類似している語形はほかにも存在する。以下では乱暴ではあるが、ノグリキで得られたサハリン東方言とアイヌ語、ウイльта語の語形比較を行いたい。

「コマイ」 *kankay*(A), *qaŋi*(N), *kaaŋai*(U)

「キュウリウオ」 *arakoy*(A), *arqe*(N *Савельева и Таксами*), *ar^hqi*(N), *arku*(acc. *arkoo*)(U)

「酒」 *arakke*(A), *araq*(N), *arakki*(U)

「ホッキガイ」 *mokomay*(A), *moʁmi*(N), *muxumai*(acc. *muxumakkee*)(U)

「手袋」 *matuper*(A 宗谷), *matumere*(A 東海岸?), *wampakka*(A 新聞), *wamk*(N), *wampək*(N), *mambakka*, *wambakka*(acc. *wambakkaa*)(U)

「タバコ」 *tamx*(N), *tampaku*(A), *saŋna*(U)

なお、

「卵」 *ŋojeq*(N), *noki*(A), *ŋojokko*(U)

はニヴフ語とウイльта語のほうが類似している。

タバコについては、アイヌ語は日本語から借用した可能性が高い。ただし満洲語 *dambagu* からの借用の可能性もある(注 20)。また、「酒」「手袋」も分布からみてアイヌ語本来の語ではないと思われるが、語形だけからみれば借用先はウイльта語であろう。

2-2. ニヴフ語における「母音欠落」

従来指摘されている通り、ニヴフ語では語末の母音が欠落している(注 20)。ここではニヴフ語における類似語彙がアイヌ語やウイльта語のそれに比べて母音が少なくなっているようにみえる例を「母音欠落」と呼ぶ。必ずしも通時的な母音の消失を意味するわけではない。

2-3. ニヴフ語の語末で母音欠落していて直接借用が疑われる例

ニヴフ語末で母音が欠落していても、当然ながら必ずしもアイヌ語とウイльта語との借用関係を意味するわけではない。例えば

「箸 (はし)」 c^hafq(N), sahka(A), sabuu(sabukkoo)(U) cf. pasuy(A 北海道)

などはおそらく同起源であり、アイヌ語においても借用語だと思われるが、借用の詳細はわからない。北海道方言で pasuy(A) である一方、満州語 sabka が高い類似性を示し、北方ユーラシアに広がる語彙であるため分布から見て南下してきた語彙と思われる。また、

「ヒザラガイ」 ker^h(N), kero(A), əmə(acc. əmməə)(U)

「ウサギ」 osq(N), osukeh(A), tuksa(U)

などはウイльта語に類似語形が見当たらない(注 21)。これらの例から、ニヴフ語に母音欠落が見られる類似語彙でも、アイヌ語との間に直接の借用関係があった可能性があると考えうる。

2-4. アイヌ語-kay とニヴフ語-ŋi を含む動物名称

動物名称でアイヌ語-kay とニヴフ語-ŋi という対応が目をつく。R. Austerlitz はニヴフ語において-ŋa < *ŋai < ŋa+*i という変化を推定した(注 22)。これらの語尾を持つ動物名称を示す。ニヴフ語は断らない限り 1999~2001 年のノグリキでの調査からえられたデータである。できるだけウイльта語も示す。

(1) アイヌ語とニヴフ語が類似語形

「トナカイ」 tunakay, tunahkay(A), tlaŋi(N), ulaa(U)

「コマイ」 kankay(A) qaŋi(N) kaanŋai(U)

(2) アイヌ語に-kay がありニヴフ語に-ŋi がないもの

「ジャコウジカ」 opokay(A), meq(N), uŋəə(acc. uŋəkkəə), uŋŋəgə, uŋee(U)

「ドジョウ」 cicirakay(A 樺太), cicira(A 北海道), (ニヴフ語不明)

また、アイヌ語だけ確認できたものとして、

「成魚」 konokay(A)

「サナダムシ」 parakankay(A)

「カワセミ」 sokay(A)

(3) ニヴフ語に-ŋi がありアイヌ語に-kay がないもの

「マス」 hemoy, icaniw(A), teŋi, paŋi(N), tuumə(U)

「リス」 rohse, setunrox, atatnika(A), kuŋurŋi(N), xələ(U)

「ハエ」 tomos, otomus, otumus(A), tʲoŋi(N) jiiluwə(U)

「クモ」 hacikonkon, hacikonkoni(A), klulŋi(N) təənənŋi(U)

「コイの一種、タナゴ」 tr^haŋi(N)

2-5. Austerlitz の再構形

R. Austerlitz は-ŋi の古形に*ŋai をたてており、アイヌ語-kay はその借用とみなして

いる（注23）。逆方向つまりアイヌ語の-kay からの借用と考えなかったのは

- (1) ηi (N) 「トナカイ<牽く(*t1a)・動物」などニヴフ語で分析できる語がある。
- (2) * ηai はさらに $\eta a + *i$ に分析できる。
- (3) 「トナカイ」はニヴフ文化にあるが、アイヌ文化にはない。

などの理由であろう。語末に-kay を持つアイヌ語動物名称はほとんどが樺太方言であることもそれを支持すると思われる。しかし、「ドジョウ」*cicirakay* (A 樺太), *cicira* (A 北海道) の例からみると-kay は樺太方言的であると同時に、生産性のある語尾だった可能性がある。また前項のように、アイヌ語で-kay があってもニヴフ語で ηi がなく別の語形である例 2-3(2)、ニヴフ語で ηi があってもアイヌ語で-kay がなく別の語形である例 2-3(3) が多い。

2-6. アイヌ語で-ka を含む動物名称

アイヌ語の一部の動物名称に-ka という語尾がみられる。知里眞志保は「二歳アザラシ」*riyanka* (A) を *riya-nka* 「越冬した・nka」と解釈し *nka* をニヴフ語 ηa 「動物」の借用語とした(注24)。知里はニヴフ語、ウイльта語でも「同じ名で呼ぶ」としているが、おそらく *tejaŋaa* (N 服部), *čeerŋa* (U) のことであろう。なお山本祐弘はニヴフ語源説をとっている(注25)。知里の分解した-nka とは少しずれるが、-ka という形で、動物名称の語尾にみられる例がほかにもある。

「ミミズ」*tuninka* (A 樺太), *tunin* (A 北海道), cf. 「うじ虫」*č^hxevr* (N Савельева и Таксами), 「ミミズ?」*č^hikəmək* (N Крейнович)

「カモの一種」*ahunka* (A), *aunk* (N Савельева и Таксами), *auŋga* (U)

「コウモリ」*keputenka* (A), *dolbolduu* (acc. *dolboldukkoo*) (U), ニヴフ語不明。

「チョウ」*kapahka* (A), *tap, kuɣl* (N Савельева и Таксами), *guuguldu* (U)
cf. 「コウモリ」*kapap* (A 北海道)

その他

「カジカ」*esokka* (A 樺太・北海道), *lasq, pasqə* (N) *laskanga* (acc. *laskaŋŋaa, laskaŋamba*) (U)

「カレイ」*tantaka* (A 樺太) *loq, əsk* (N), *lokko* (acc. *lokko*), *əskə* (acc. *əskəə*) (U)

「カニ」*takahka* (A 樺太) など。

語形全体が類似している *ahunka* (A), *riyanka* (A) の 2 例に関してはニヴフ語からの借用語という可能性が高い。これらは知里の指摘した通り-nka という語尾である。なお、*ahunka* (A), *aunk* (N), *auŋga* (U) に関しては、アイヌ語・ニヴフ語では鳥の鳴き声を模した名称なので、類似は当然かも知れない（ウイльта語に関しては未確認）。北海道の語形 *tunin* (A) や *kapap* (A), 樺太方言形 *kapah* (A) に-ka が接尾して樺太方言形が形成されているものは、(1) ニヴフ語からの借用の後北海道方言で-ka が脱落した (2) 樺太方言で-ka が付加された、という 2 通りの可能性が考えられる。後者だとすれば、樺太方言において

-ka が指小辞・類別詞などのような、名詞につく何らかの接尾辞だった可能性がある。北海道方言にないという分布から見ても、アイヌ語の-kay, -ka (を含む語彙は) ニヴフ語の*ŋai, ŋa からのそれぞれの時期の借用語なのかもしれない。

2-7. ニヴフ語の短母音とアイヌ語の二重母音の対応

-kay (A) と -ŋi (N) 以外でも、アイヌ語が語末で ai, oi, ニヴフ語が語末で i を持つ例がある。2-1 であげたもののうち、以下の 2 例である。

「ホッキガイ」 mokomay (A), moʋmi (N), muxumai (acc. muxumakkee) (U)

「キュウリウオ」 arakoy (A), ar^hqi (N), arqe (N Савельева и Таксами), arku (acc. arkoo) (U)

mokomay (A) あるいは muxumai (U) と moʋmi (N) は大きく語形が異なるが同じ貝を示すことから借用関係にある可能性が高い。語中での akam 「環」 (A 北海道) と aʋm, aʋm 「環、指輪」 (N) にみられるような母音欠落と、-kay (A) と -ŋi (N) の間にみられるような語末での母音の対応 (ニヴフ語における二重母音の変化?) が共起しているのかもしれない。ただニヴフ語との間に借用関係があったとしてもアイヌ語とウイльта語とどちらとなのかはわからない。一方、arakoy (A) と ar^hqi, arqe (N) については、ニヴフ語において oi > i などの変化を想定する必要はない。ニヴフ語の qi は音声的には qøi に近く発音されることから、アイヌ語に kay で借用されたと考えられる。アイヌ語樺太諸方言で r が音節末にたたない (母音が附加される) こと、タライカ方言形として arkoy (A) が知里 (1976) にみえることから、ニヴフ語からの借用という可能性が高いと思われる (注 26)。

2-8. ウイльта語からの借用可能性例

2-1 で示した、ニヴフ語よりウイльта語や日本語との類似性が高いアイヌ語語彙例のうち、2-2~2-6 で説明しきれないものは「酒」「手袋」「箸」である。前述した通り分布からはアイヌ語の本来語とは思えない。これらについてはウイльта語もしくは満州語から借用されたと考えるのが妥当であろう。

3. 結論

2-8 の 3 例以外つまり大部分の類似語彙は、ニヴフ語に母音欠落があってもニヴフ語とアイヌ語の間で直接借用した可能性がある。その場合母音欠落に何らかの説明が可能である。しかし sintoko (A), sinduX (N), siltukku, sittoo (U) は説明ができない少数例である。

《注》

注1 Kenvŋ氏族出身者からの採録。ここでは便宜的にポロナイスク方言と呼んでおく。ニヴフ語はアムール方言 (アムール地方およびサハリン島西海岸)、サハリン東方言 (サハリン島東海岸)、シュミット方言 (サハリン島北部) に大別される。ポロナイスク方言 (サハリン島中部) はサハリン東方言に非常に近いようである。

注2 高橋盛孝 (1942) p137. 敷香の日本人集落が舞台となる口承文学に登場する。

注3 ノグリキにて西海岸出身の女性から。どのようなものか思い出せないようだったが、樽ではない、という。

注4 2001年ノグリキにて。ノグリキ近郊出身の女性から。

注5 山本祐弘(1943) p 43。

注6 現在のノグリキではプラスチック製あるいは金属製の大型容器が用いられている。

注7 新得町の地名語源解としては疑わしい。

注8 高橋盛孝(1942)p137。

注9 トルコ語はH. C. Hony (1967)、チュヴァシ語はИ. А. Андреев и Н. П. Петров (1971)、キルギス語はК. К. Юдахин (1965)、タタール語はГоловкина (1996)、バシキール語はГ. Р. Каримова (1958)、ペルシア語は古島百合子(1993)、シュグナール語はД. Карамшоев (1991)によった。

なお、クルド諸語とあるのはFerhengî Namo氏の開設する以下のサイトによる。何語か詳細は不明。<http://www.namonet.com>。このオンライン辞書 Namo Dictionary English - Kurdish, Kurdish - English dictionary. による。

注10 東郷正延ほか(1988)

注11 Черных (1993)

注12 Пекарский (1917)

注13 Цыдендамбаев и Имехенов (1962)

注14 実物は未確認。

注15 小松格 (1980)

注16 東郷正延ほか(1988)

注17 Цинциус (1977)

注18 萱野茂 (1978) p 236

注19 真鍋浩史(1994)。なお真鍋は類似語彙でニヴフ語の語末母音の欠如していることから、主としてウイльта語とニヴフ語の間の借用関係について論じている。

注20 以下満州語は羽田亨(1972)による。

注21 ker^h(N)は貝の一種ともいわれる。

注22 Austerlitz (1993)

注23 Austerlitz (1993)

注24 知里眞志保(1976)

注25 山本祐弘(1968) p 71

注26 服部健(1952)ではarkai、高橋盛孝(1942)ではaʃkəという語形があげられている。ポロナイスク方言資料に関しては今後の課題としたい。

《引用文献》

H. C. Hony (1967) H. C. Hony, *Turkish-English Dictionary*, Oxford at the Clarendon Press

R. Austerlitz (1993) 「動物分類語彙とその分析(昆虫類)」文部省科学研究費補助金研究成果報告書『サハリンの少数民族』所収

池上二良 (1997) 『ウイльта語辞典』北海道大学図書刊行会

萱野茂 (1978) 『アイヌの民具』運動協力者版

小松格 (1980) 『ウズベク語辞典』泰流社

高橋盛孝 (1942) 『樺太ギリヤク語』大阪朝日新聞社

- 知里眞志保(1976) 「分類アイヌ語辞典 動物編」『知里眞志保著作集 別巻Ⅰ』所収 平凡社
- 東郷正延ほか(1988) 『研究社露和辞典』 研究社
- 服部四郎(1964) 『アイヌ語方言辞典』 岩波書店
- 服部健(1952) 「樺太ギリヤークの漁労語彙」『服部健著作集』所収 北海道出版企画センター 2000年
- 羽田亨(1972) 『満和辞典』 国書刊行会
- 古島百合子(1993) 『ペルシア語辞典』 東京
- 真鍋浩史(1994) 『ウイльтаの社会における漁労文化と語彙借用についての考察』千葉大学卒業論文 未刊
- 山本祐弘(1943) 『樺太原始民族の生活』 アルス文化叢書
- И. А. Андреев и Н. П. Петров (1971) *Русско-Чувашский Словарь*, Москва
- Головкина (1996) *Татарско-Русский Словарь*, Москва
- Д. Карамшоев (1991) *Шугнанско-Русский Словарь Том 2*, Москва
- Г. Р. Каримова (1958) *Башкирско-Русский Словарь*, Москва
- Е. А. Крейнович (1973) *Нивхгу*, Южно-Сахалинск, 2001
- Э. К. Пекарский (1917) *Словарь Якутского Языка Том II*, Петроград
- В. Н. Савельева и Ч. М. Таксами (1965) *Русско-Нивхский Словарь*, Москва
- В. И. Цинциус (1997) *Сравнительный Словарь Тунгусо-Маньчжурских Языков Том II*, Ленинград
- Ц. Б. Цыдендамбаев и М. н. Имехенов (1962) *Русско-Бурятский Словарь*, Москва
- П. Я. Черных (1993) *Историко-Этимологический Словарь Современного Русского Языка Том II*, Москва
- К. К. Юдахин (1965) *Киргиско-Русский Словарь*, Москва

付録 本文中で触れた類似語彙一覧

シントコの類似語

| | アイヌ語 (A) | ニヴフ語 (N) | ウイльта語 (U) |
|---|-------------|-------------------------|---|
| 樽 | sintoko (A) | sinduX (N), sindux (N*) | siltukku (acc. siltukkoo) 「たらい」, sittoo (acc. sittokkoo) 「樽」 |

アイヌ語とウイльта語の類似

| | | | |
|--------|--|--|---|
| ロシア人 | nuca (A) | loc ^h a, loc ^h (N) | luča (acc. luččaa) (U) |
| 木幣 | inaw (A) | naw (N) | illaw (U) |
| コマイ | kankay (A), | qaŋi (N) | kaaŋai (U) |
| キュウリウオ | arakoy (A), | arqe (N*), ar ^h qi (N) | arku (acc. arkoo) (U) |
| 酒 | arakke (A) | araq (N), | arakki (U) |
| ホッキガイ | mokomay (A) | moŋmi (N), | muxumai (acc. muxumakkee) (U) |
| 手袋 | matuper (A 宗谷), matumere (A 東海岸?), wampakka (A 新間) | wamk (N), wampək (N) | mambakka, wambakka (acc. wambakkaa) (U) |
| タバコ | tampaku (A) | tamx (N) | saŋna (U) |
| 卵 | noki (A) | ŋojeq (N) | ŋojokko (U) |
| 箸 | sahka (A), cf. pasuy (A 北海道) | c ^h afq (N) | sabuu (sabukkoo) (U) cf. sabka (満洲語) |

2-3 ニヴフ語の語末で母音欠落していて直接借用が疑われる例

| | | | |
|-------|------------|----------------------|----------------------|
| ヒザラガイ | kero (A) | ker ^h (N) | əmə (acc. əmməə) (U) |
| ウサギ | osukeh (A) | osq (N) | tuksa (U) |

2-4. -kay (A) と -ŋi (N) を含む動物名称

(1) アイヌ語とニヴフ語が類似語形

| | | | |
|------|-----------------------|-----------|------------|
| トナカイ | tunakay, tunahkay (A) | tlaŋi (N) | ulaa (U) |
| コマイ | kankay (A) | qaŋi (N) | kaaŋai (U) |

(2) アイヌ語に -kay がありニヴフ語に -ŋi がないもの

| | | | |
|--------|--------------------------------------|---------|--|
| ジャコウジカ | opokay (A) | meq (N) | uʃəə (acc. uʃəkkəə), uʃʃəgə, uʃee (U) |
| ドジョウ | cicirakay (A 樺太), cicira (A 北海道), | ? | ? |
| 「成魚」 | konokay (A) | ? | ? |
| サナダムシ | parakankay (A) | ? | ? |

| | | | |
|------|-----------|---|---|
| カワセミ | sokay (A) | ? | ? |
|------|-----------|---|---|

(3) -ŋi (N) があり -kay (A) がないもの

| | | | |
|-----------------|-----------------------------------|-----------------|--------------|
| マス | hemoy, icaniw (A), | teŋi, paŋi (N), | tuumə (U) |
| リス | rohse, setunrox, atatnika (A), | kuɣurŋi (N), | xəle (U) |
| 「ハエ」 | tomos, otommus, otumus (A), | tʰoŋi (N) | ʃiiluwa (U) |
| クモ | hacikonkon, hacikonkoni (A), | klulŋi (N) | təənənʃi (U) |
| 「コイの一種、 タナゴ」 | trʰaŋi (N) | ? | ? |

2-6. アイヌ語で -ka を含む動物名称

| | | | |
|---------|---|---|---|
| ミミズ | tuninka (A 樺太), tunin (A 北海道), | 「うじ虫」 cʰxevr (N*), cf. 「ミミズ？」 cʰikəmə k (N**) | ? |
| 「カモの一種」 | ahunka (A), | aunk (N*) | auŋga (U) |
| コウモリ | keputenka (A), | ? | dolbolduu (dolboldukkoo) (U) |
| チョウ | kapahka (A), cf. 「コウ モリ」 kapap (A 北海道) | tap, kuɣl (N*) | guuguldu (U) |
| カジカ | esokka (A 樺太・北海道) | lasq, pasqə (N) | laskanga (acc. laskaŋŋaa, laskaŋamba) (U) |
| カレイ | tantaka (A 樺太) | loq, əsk (N), | lokko (acc. lokkoo), əskə (acc. əskəə) (U) |
| カニ | takahka (A 樺太) | ? | ? |

N* Савельева и Таксами

N** Крейнович